

春燈

6 月号

June 2010



主宰の句

安立公彦

春曙けふの時また刻み初む

鳥雲にわれは海の子磯魚取る

くつがへる波音ひとつ春の海

花冷の夜半のラジオに李香蘭

ゆく春や志功板面の羽黒山



燈下集



○ 益田寿美子

枝垂れ影の青春もどらぬ飛花朧

飛花落花巻かれ佇む「戻りやんせ」

なきひとを樹齡に仰ぐ春の星

房総惜春なめろう食べて貝ひらふ

加齡とは夢見も浅く闇の春

○ 阿部泰子

春の風上り下りの定期船

春風や母の家訪ふ姉妹

春風や小波寄する隅田川

親娘して作る中食春の風

隅田川どての桜の満開す

○ 西谷良樹

中華鍋炎ゆたかに春菜炒る

でんでん太鼓に執す童や猫柳

風見鶏終日東風と対峙せる

茎立や畑のすみの直売所

鳥の恋完成近き新駅舎

○ 太田具隆

露の臺摘まずに措けよ庭の心

乱杭の乱のほどよく水温む

芽吹きたりぶつきらぼうな木の枝が

二度三度しだれざくらの中に立つ

荒庭に馴染みていとし山つつじ

○ 長 浜 徳 三

竜天に登り火口湖波立てり

合格子哲学書買ひボルノ誌も

啓蟄や快気の妻のそと出ぐせ

彼岸明け良きこと語る墓前かな

大観の絵を観てよりの桜かな

○ 綱 徳 女

水温む小橋渡れば札所寺

二人して青きを踏まむ暮るるまで

故郷はこの浜伝ひ蜃気楼

恬淡と海市見てをり消ゆるまで

仮の世に未練うするる花の鬘

○ 末 吉 治 子

大庫裡を守る木杵の春火桶

レールより太陽まぶし雪解道

文楽のお染の口説き臍かな

静謐な吉野桜や庭に散り

粉引徳利鳥の落せし桜挿す

○ 滝 沢 幸 助

万愚節おもひ出すこと出せぬ事

ものの芽や一画の誤字おそるべし

死後の詠ゆるすべからず春の月

三月尽ものをさがして又ひと日

鮎子一万いとし恐ろし二万の目

○ 中 村 嵐 楓 子

三月十日赤魔走りて嗤ひけり

つばくらや小口も卸す合羽橋

亀鳴くやラ抜き言葉の老神父

壺焼やまんまと老いし美少年

源氏読む折口信夫面霞み

○ 鷹 崎 由 未 子

靖国の魂に斎けり朝ざくら

初花を彼の世の母の便りとも

初花や野仏在せば手を合はす

人の世話やくが楽しき花笑ふ

初花にたつきの音をひかへけり

○ 萩原 すみ

もんべはき葱売りの来ておたりけり
杖にせよと枯木拾ひてくれにけり
笙ひちりきにさそひだされし牡丹の芽
彼岸寺友の墓へとまはりけり
長生ぎの花道かとも花吹雪

○ 小張 昭一

建国日指に遊ばす弥次郎兵衛
馳せ参ずいざ鎌倉の梅見頃
椀の芽を摘んで湯治の仲間入り
囀や木霊吸ひ込む磨崖仏
まほろばの酒は「春鹿」鐘霞む

○ 鈴木 鳳来

みちのくや雀隠れに塞の神
山笑ふ蝦蟇の油の口上書
春疾風馬場大門の大櫓
のつとりと堰を落ちゆく春の水
じやがたらの芽生えを嘆く厨妻

○ 松本 峰春

春の灯の大き昭和の一灯失す（哀悼・五句）
春の夜の「花喰鳥」へともせる灯
花喰鳥囀るとより慟哭す
一句集銜へて引けり花喰鳥
和昭仏へ会ひたき雲雀鳴き響む

○ 中野 英伴

疑はば切りなき薬効春の昼
白魚の透きに嘘なし目にあはれ
ふるさとを捨てる強がり春の虹
卒業や恋を抱ける少女の香
松あはれおぼろによはひひそめをり

○ 木村 傘休

一徹に師系ともせり春灯（中島和昭氏を悼む）
知遇得し日数を思ふ春の雨
院外の風まださむし黄水仙
身の内の我鬼と目の合ふ春の夢
春日遅々旅行案内身辺に

〈春燈賞受賞作家・特別作品30句〉

旦暮抄

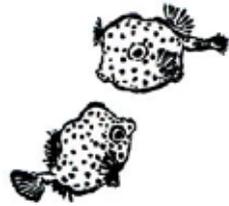
竹内慶子

老い母に佳きこと伝へ大服茶
豊頬の少女水仙持て来たり
年寄に優しき娘花かるた
うからやから長寿を囲む年始かな
「一陽来復」大きく吉書かかげたり
臘梅や旧家を守る翁眉
黒式尉とまなこあひたる淑気かな
取り分くる煮しめの艶や初座敷
葛飾にくらす幾とせ祝箸
まゆ玉や皆仲良くと師のをしへ
気つぶ良き「春燈」育ち春ごろも
姉弟子の達者な声音切山淑

やはらかに出づる望月睦月尽
春節や朱塗りの杯を重ねつつ
菅公のみづら姿や菜種御供
配達の封書の重き雨水かな
子の婚や船をゆかする春の海
まさをなる空へ風船放つべし
花嫁の父は道化て魚は氷に
巢立鳥あつけらかんと去りにけり
嘘ひとつあたためにけり木の芽どき
あたたかな雨に打たる一人の日
啓蟄や隣家の猫のなつきたる
仔猫にも電話のこゑを聞かせけり
杏咲く普段着のまま街へ出づ
春疾風亡き祖父祖母を連れて来よ
春三日月佳きを詠めと尖りけり
琉球の三線つまむ花筵
手拍子にお婆の出番花吹雪
落花ひとつ雨傘にのせ帰りけり

当月集

安立 公彦選



○ 篠原幸子

青年の幼顔して草の餅

露味噌に心身の邪気いなしけり

忌の膳に一片の花今し散る

初蝶の風柔らかによぎりけり

春愁やワイン・グラスをはじく音

○ 片山博介

花喰鳥花を待たずに発たれけり（悼・和昭先生）

椎の木の芽吹の雨や幻住庵

雁ゆくや納戸に古りし幻灯機

「山家集」手許に置くも花のころ

篝火の翳に吸はるる落花かな

○ 金子輝

つちふるや書架に「シベリア抑留記」

鑑真のまなざし固しよなほこり

いち抜けたままのしじまや春夕べ（悼）

これよりは夢見る国へ蝌蚪の紐

ダリの髭そつと撫でたき月おぼろ

○ 宮崎紗伎

鳥雲にひたすら回る木馬かな

湿原に風そだつ日を鶴帰る

万愚節泣虫の子のふたつむじ

耳鳴のしばし途切るや木の芽雨

春愁や木椅子に残るガラス瓶

○ 小田明美

リラ冷や運河づたひの煉瓦堺

花冷の息に曇りしカフェの窓

花の舞ひ古都に優しき嘘ひとつ

他愛なき鬱二つ三つ花筏

花過ぎの湯をすすりぬる黙の午後

春燈の句

安立 公彦選

春深し男嫌ひの猫とゐる

東京 大草由美子

徳利抱き誘はれゆくや雛の家

黄沙色にそまる貌もて引揚げし

糺天や韃靼の馬疾走す

安曇野や月光はしく雪解川

山菜莢の花や気動車ゆるり発つ

石垣の上にかたくり花一つ

本郷の坂の往き来や啄木忌

桜咲く刻の静けさ母許に

天に鳶地に花影のありにけり

裏山に風吹く日なり蝮草

生薬に球茎の毒万愚節

春愁や据りの悪き石一つ

日脚伸ぶと言ひつつ地図をひろげをり

東風吹くやこんなところに酒の倉

多喜三忌や芥火となる竹の節

春禽の声を見上ぐるふたりかな

磯遊びいつしか沖を見つめをり

永き日のテトラポッドの吐息かな

相槌を猫に打たすや万愚節

木の芽雨山の樹木へざんざ降り

青空ゆ真砂女の詩の紫木蓮

夜桜や妖精宿る揺れ少し

踏切や通過の貨車に落花急

蘆の角満ちくる潮の速さかな

磯遊び突堤にはや鳶の舞ふ

すきみ橋渡る足もと夕朧(松島)

木々の芽を見上ぐる子らの眼かな

また呼んでゐる啓蟄の庭の夫

風光る潮の香りを導べとし



千葉 藤原 若菜

神奈川 小山 繁子

千葉 海村 禮子

神奈川 浅木 ノエ

余言

安立公彦

句座ひとつ空きしままなり鳥雲に

西川 保子

中島和昭さんの訃報が四月号で発表されると、六月号の春燈誌には多くの人から追悼句が寄せられた。作者のこの句もその一つ。「句座ひとつ空きしままなり」という明確な表現に、作者の和昭さんへの哀惜の思いが、余すところなくこめられている。

或る時を境に、在るべき姿が無くなるということは、現世の習いである。この世にある限り、私たちにはその悲しみから通れるすべはない。

作者の同時発表句、〈珈琲豆碾く春愁の音に碾く〉の、「音に」にも、失われた生命への思いが深く宿っている。

その他の皆さんの追悼句から。〈一徹に師系ともせり春灯傘休く、あたたかやナースを誉めて逝きませり 孝村〉、〈花喰鳥花を待たずに発たれけり 博介〉、〈読み返す師の句や春の夜を更かし 久子〉。思いの深い句だ。

四月号の「掲示板」にもある通り、和昭さんは龍岡晋氏に師事し、晋氏指導の「斑猫集」に十余人の人達と作品を寄せていた。その最終号は「斑猫集(その三)」として昭和五十八年八月を以て終っている。龍岡晋氏の死去が五十八年十月十五日。「斑猫集」で共に研鑽を積んだ、富崎梨郷、倉田春名氏ほか殆どの皆さんも故人となっている。その「斑猫集」五十八年八月号の和昭さん最後の句は、

切子吊り母に間近くゐたりけり 和昭

くらしの灯消してもせれる切子かな //

少年図書館を出て蝸に鳴かれけり //

中島和昭さん 五十五歳の作品である。悼

啓蟄や柱に褪せし来迎図 佐藤 信子

この句、三月本部句会の時は上五が「初蝶や」だった。「来迎図」は辞書によると、「西方浄土の阿弥陀如来が、衆生を救うため諸菩薩即ち聖衆を従えて人間世界に下降するさまを描いた仏画」とある。当麻寺には二十五菩薩来迎像という群像がある。仏像はもとより、来迎図、また涅槃図にしても、この領域の奥ゆきは深い。作者はその仏宇、仏像に深い造詣を持つている。

この句、「初蝶」が「啓蟄」に変わり、一句の焦点が定まった。聖衆に啓蟄の季語はふさわしい。寺の格式も自ずと感得され

る。

膝抱けば落ち着く腰や四月馬鹿

橋爪 隆

なつかしい季語である。〈四月馬鹿ものおもふことにつみありや 万太郎〉、〈万愚節に恋うち明けしあはれさよ 敦〉。こういう句を素直に読むことが出来た時代はどこに行つてしまったのか。諷刺とユーモアの存在する社会は一面、良識のある社会である。「四月馬鹿」という季語もそういう時代が育んだものと言える。

作者はその四月馬鹿に、「膝抱けば落ち着く腰や」と付ける。今年九十一歳の高齢の身、時に腰のふらつきもあるうというもの。それをあえて「四月馬鹿」と結んだところに作者の精神の強靱さを感じる。同時に作者の風貌に接しているような懐かしさを覚えるのだ。

山の宿独活を刺身に独り酌む

佐々木 新

人生或る年代になると、こういう句を詠める場に身を置く願望を思う。しかもその山宿は、〈定宿の妻籠の軒端初燕〉の宿だ。自ずと『夜明け前』を思い、「木曾路はすべて山の中である」と口ずさむ。

また「独り酌む」もいい。淡々とした表現の中に、作者の思いが良く出ている。

忌の膳に一片の花今し散る

篠原 幸子

回忌の膳である。人の死への悲しみも、時の経過とともに僅かずつながらうすれてゆく。

その膳に開け放した窓から今しもひとひらの桜が散りかかる。それは忌に集う現世の人の心を癒そうとする、彼の世の人の風のような思いがもたらすのかも知れない。

リラ冷えや運河つたひの煉瓦塀

小田 明美

近頃は、リラにしてもミモザにしても、ヨーロッパ産の花木が街なかでよく見られるようになった。この句、明治期の港湾風景を連想させる。しかし内容は新しい。何よりも言葉の選択がいい。作者は大阪堺の人。

ジッパーの嚙んで放さず花疲れ

矢口 笑子

真砂女に、〈坐りたるまま帯とくや花疲れ〉という句がある。風情のある句だ。作者の句、上五中七が全てを語っている。花冷えの頃とて、花見から帰ると疲れが出る。羽織ったコートを脱ごうとするとファスナーが動かない。

それを作者は「嚙んで放さず」と表現する。作者の焦燥感が見えるようだ。しかしこの「嚙んで放さず」は微妙な思いを的確に表わしている。季語もまた適切である。